

1-② 指導体制の充実

SWOT分析（学校の強みと弱み）を踏まえ、推進する外国語活動

柏崎市立北条小学校 小林 多佳子

1 研究の視点に関する実態

今年度赴任した柏崎市では、授業時数の方向性や使用補助教材、年間指導計画等が市教育委員会から示され、教科化に向けた学校職員の不安や負担増に対して環境面で配慮を感じてきた。当校における外国語教育の取組状況は、次の通りである。

時数	(平成30年度)3・4年 15時間 5・6年 50時間 (平成31年度)+5時間の予定
時数の確保	委員会・クラブ活動以外の金曜6限と夏季休業の短縮から時数の確保に努める。
ALT	週1回来校し、3・4年は全授業、5・6年も35時間に加わる。
研修の機会	市教育センター主催 示範授業の会場校 11月 (職員全員研修)
デジタル教材 ICT環境	各教室でデジタル教材「Hi, friends!」「We Can」「小学校英語デジタルピクチャー」「ジョリーフォニックス」が使用できる環境にある。6年教室のみ電子黒板あり。

タイトルのSWOT(スワット)分析とは、学校内外の具体的な状況をプラス・マイナス面で分類し、課題解決を構築するための手法である。校長として上記の実際を見極め、組織の強みを活用し弱みを補強しながら、教科化に向けた校内体制を軌道に乗せられるよう以下のような取組を考えた。

2 改善のための具体的な方策と取組内容

当校は7学級、全校児童101名、職員数は14名の規模である。職員は若手からベテラン層まで各年齢層が揃い、外国語教育主任は研究主任が兼ねている。

- (1) 組織や今行われている校内外の強み・弱みを踏まえ、校内で取り組むべき方向性を探る。
- (2) 今ある強みを活用し進める。
 - ・外国語教育主任の主体的な取組を後押しする。外国語が堪能な職員が中心となつての外国語研修を通し、職員同士で気軽に授業づくりを学び合い、授業イメージを共有した。
 - ・小中学校が施設一体型の恵まれた環境にある。小中連携の一つに、小中学校職員が教科ペアで授業を見合い、「各教科の連携・接続シート」を活用した指導連携がある。校種間の自校の請け負う役割を明確にする機会にする。
 - ・副教材「ジョリーフォニックス」を毎回繰り返す学級は、発音や語彙等で指導の効果を参観授業で感じた。研修を通しそのよさを理解し合い、積極的に活用できるよう進めている。
- (3) 弱い部分を検討し今後につなげる。
 - ・外国語教育に対する戸惑いや曖昧さが職員にある。「慣れ親しむ」から「中学校英語の前段階の学び」として取り組むことは何か、目標を自校化していく過程が必要である。情報提供を管理職も行い、職員室の中で話題になる機会を増やす。
 - ・着手がしやすいこと・効果が上がりやすいことから始め、難しさや時間を要することは早急な取組にせず年度の見通しをもつ。
 - ・授業力は「できる」より「子供と楽しむ」ことを第一とし、日々の授業参観を推奨する。

3 取組の成果と残された課題

SWOT分析の手法は様々な場面で活用ができ、校内の現状を考える視点ももてる。強みの部分は職員に委ね、主体的に動く部分をまず大切にすることがプラスの効果を生んでいった。小学校教員は英語を教えるプロと言える者は少ないため、授業の質をどの学級でも確保していけるかが課題である。克服すべき弱み(解決策)については、進む方向性と環境を整理し、ミドルリーダーや外国語教育主任と少しずつ解決に向けて推進することがベターであると考えている。